

台湾における日本の漫画—ジェンダーと他者—

涂銘宏(トゥ・ミンフン、台湾淡江大学英語学部助教授)

1. 台湾における漫画の歴史

(1) ナショナリズム、植民地時代の影響と検閲

(2) 日本が与えた影響とノスタルジア

(3) 台湾の女性漫画家の時代

2. ジェンダーと漫画

(1) ジェンダーとジャンル

(2) 少女マンガと若者文化

(3) 台湾のBL(ボーイズ・ラブ)漫画

3. 台湾の漫画・アニメファンカルチャー

(1) 漫画の力と、台湾のコミックマーケット(動漫祭)

(2) 同人誌文化

(3) コスプレ文化

4. 結論 女性、漫画、未来

1. 台湾における漫画の歴史

台湾の漫画の歴史は、米国、中国、日本という3カ国から受けた大きな影響を抜きには語れない。この3カ国の中でも、作画スタイル、ストーリー傾向（ストーリーライン）、さらには大衆文化におけるマーケットの深い浸透という点で、日本は台湾に最も重要な影響を与えている国である。私自身を含め、ほとんどの台湾の人々は、「ドラえもん」、「ちびまる子ちゃん」、手塚治虫の名作など、日本の漫画とともに育っている。当初から、日本や日本の植民地という存在が、台湾の漫画文化において特別な地位を占めていた。まずは台湾の漫画の歴史を主に6つの時期に分けて考えたい。

1) 台湾独自の漫画界の夜明け（1945－1955）

日本の統治下にあった1940年代の初頭、地元の漫画アーティスト達が、第一波として、「新高漫畫集團」という同人誌のグループを設立し、1945年、「新新月刊」という自費出版の漫画雑誌を8号まで出版した。これらのアーティストたちは、日本で修行を積んだか、あるいは、見習い時代に当時の日本の漫画のスタイルから大きな影響を受けたかのいずれかであった。

中国本土による体制となり、台湾領土を主張し始めた後、漫画が普及する主要な手段となったのは新聞であった。読者が少なく、印画技術もまだ不十分という面もあった。ニュースの活字メディアでコミック・ストリップを広めるほうが、コストの面では効率が良かった（例：牛哥による「牛小妹」）。一方で、新しい中国国民党が、国民の中国語の識字率への配慮から、広報や政治宣伝に漫画を利用するという面もあった。

1953年、漫画雑誌が初めて商業的な成功を収めた。「學友雑誌」である。この雑誌には現地の漫画と日本の漫画の両方が掲載されていた。台湾の漫画アーティストによる最も人気のあるシリーズの一つが、中国の古典小説である「西遊記」をベースにした、陳定國による「三藏取經」であった。

2) 老舗雑誌の黄金時代（1955－1965）

「學友雑誌」の成功により、「東方少年」、「新學友」、「中國少年」など、子供向けやティーン向けの漫画雑誌のブームが起きた。1958年には、長年にわたり発行されている老舗の漫画雑誌の「漫畫大王」が誕生した。これらの台湾の漫画の大多数は、フィクションの「武俠」モノに分類される。政治的な面から言えば、「善と悪の対決」というストーリーは、国民党政府の反共政策や反ロシア政策と合致するものでもあり、政府に歓迎された。最も人気のあった「諸葛四郎」という、国を愛する英雄のフィクションのストーリーは、映画化されて大変な人気を博した。

3) 暗黒時代 (1965—1975)

1966年、漫画検閲法が施行され、地元の漫画マーケットや漫画制作は壊滅状態に陥った。多くの漫画雑誌は休刊や廃刊に追いやられた。不定期に雑誌を発行し、検閲逃れを試みる者もいた。個人の漫画アーティストの中には、香港でなんとか出版する者もいた。これにより、香港マーケットへの「漫画の移入」の波が生まれた。また何ととっても重要なのは、これにより、「日本の漫画の海賊版」の第一の波が生まれたことだ。というのも、海賊版は、その「非公認」な立場ゆえ、どういうわけか検閲から逃れたのだ。この結果、台湾の漫画読者は、日本の漫画に触れ（ある者は「再度」触れることになった）、転向するようになっていった。

4) 台湾独自の漫画のルネッサンス (1975—1985)

1975年、国立編譯館により、地元の漫画が衰退し、日本の（海賊版）漫画が飽和状態にあることが確認され、政策を変更することが決定された。その結果、政府は検閲を緩め、出版社に対し、日本の漫画を5冊発行する度に、台湾の漫画を少なくとも1冊出版するように強制した。このことがきっかけとなって、台湾の地元の漫画のルネッサンスが起きた。例えば、人気の高い老舗雑誌の「漫畫大王」は、1975年に、発行を再開した。さらに、台湾の民主化の結果、1980年代初頭に、漫画のジャンルとして「政治批判」も非常に高い人気を博した。より「進んだ」地元新聞の中には、政治的な視点の漫画と政治的な批評を並べて掲載するところもあった。

5) 日本の影響への回帰 (1985—2005)

1980年代から、ポップ・カルチャーを中心に、台湾では海外への市場開放を実施した。日本の漫画（および日本のポップ・ミュージック）は、海外から輸入された文化の中で、最も高い人気を博した。1989年、「少年快報」（「ドラゴンボール」や「シティハンター」などの日本漫画を非公式に掲載）が創刊され、すぐに商業的に大きな成功を収めた。最盛期には、毎月の発行部数が200,000部を記録した。

1987年、戒厳令が解除された後、漫画の検閲制度は廃止された。しかしながら、この頃までに、台湾の読者は「日本漫画の波」に既に魅了されており、全体的にみると、地元の漫画には興味を示さなかった。1992年、新たな時代が始まった。台湾政府は著作権法の面で大きな転換をはかった。この新たな政策により、全ての台湾の出版社は、日本の漫画の出版業者と著作権の正式な契約を締結することが義務付けられた。この年から、30冊の翻訳版の日本の漫画の雑誌が誕生した。地元の漫画アーティストを採用した漫画雑誌の数はかなり少なく、実際、合計でわずか3冊であった（「[龍少年](#)」、「[星少女](#)」、「[公主](#)」）。3年

後、これら3冊の全てが、日本のライバル誌との競争に耐えられず、廃刊に追い込まれた。

6) 台湾の新たな波 (2005年～現在)

この5年にわたり、販売部数や商業的な成功はさておき、少なくとも国際的な影響力(中国マーケットへの「侵入」を含む)や、漫画アーティストの業績という点で、地元の漫画に復活の動きが見られる。特に、親中派の国民党政権が2008年に政権に返り咲いた後、台湾と中国との文化交流が加速した。新旧様々な世代の多くの台湾の漫画アーティストが、中国で評価され、商業的な成功を収めた。

台湾の漫画アーティストのほとんどは1990年代以降に生まれており、青春期に日本の影響を早くから受けていることから、日本テイストの作風やストーリーを採用している。中でもこれは、少女漫画とSFフィクションという2大ジャンルで顕著に見られる。このような歴史的な流れを段階的に見て明らかになるのは、日本の漫画の影響を、時にとぎれることはあるものの、長期にわたって受けていることである。日本の植民地主義を経験したことやそのことに対するノスタルジアにより、台湾の消費者は、中国本土の消費者と異なり、日本の製品(ポップ・カルチャーを含む)を受け入れやすいものと捉えている(少なくともあまり抵抗を感じない)ことは間違いない。これは、日本と台湾の異文化交流や、アジアにおける日本の漫画の存在を語る際に、無視することのできない背景である。

しかしながら最近では、日本や中国の影響を避け、人道上の問題から、台湾の見解や表現をテーマにしようとする、歴史意識の高い台湾の漫画アーティストの新たな波も見られる。例えば、阮光民の「東華春理髮廳」は、長らく離れていた家族のほろ苦い再会についての、成熟したヒューマン・ストーリーである。作画スタイルも、昔の台湾の木版画を模したものである。もう一人、注目すべき新しいアーティストは、人類学を勉強したAKRUである。このアーティストの2冊の漫画、「科普雷的翅膀」と「北城百畫帖」は、西洋と日本の植民地時代の双方への相反するノスタルジーについて描いているが、台湾人の意識についても深く取り上げている。

2. ジェンダーと漫画

A. ジェンダーとジャンル

最も人気のある漫画のジャンルについては、少女ロマンスと少年アドベンチャーのフィクションが台湾のほとんどの読者を魅了している、といわざるをえ

ない。中でも、日本の少女漫画は、「大人になること」のフラストレーションや、成長を経験する上で伴うほろ苦さに関する思春期の空想において、非常に重要な役割を果たしている。また、こうした少女漫画がきっかけとなり、後に、ライト・ノベル、同人誌、コスプレなどの日本の人気の娯楽が、台湾にもたらされることとなる。

女性の漫画アーティストや女性読者は、特にこの30年の間、台湾の漫画の発展において欠かせない役割を果たしている。実際、台湾の地元の漫画の生き残りに彼女たちは欠かせない存在となっている、といっても過言ではない。中でも注目すべきは、台湾の少女漫画は日本の少女漫画に大いに影響を受けているものの、台湾の少女漫画は、日本からの輸入品の圧倒的な主導権に耐えうることができた唯一の台湾漫画のジャンルであるということだ。つまり、台湾発の漫画の制作の中で、今日にあっても、少女漫画は（少年愛ロマンス漫画とともに）、もっとも成功を収めたジャンルであるのだ。

少女漫画の影響力は決して活字メディアにとどまらない。数々の人気の少女漫画がアニメ化、ドラマ化、映画化された。ここで、グローバル化や文化の輸入および逆輸入に関する、ある面白い事例を指摘しておきたい。2001年から2002年にかけて、神尾葉子の「花より男子」という日本の漫画をもとに、台湾のアイドルのドラマ、「流星花園」（台湾のアイドル・グループのF4が出演）が制作され、アジアで大ヒットした。このドラマは2005年に日本に「逆輸入」され、日本で第一次の台流もしくは華流ブームが起きた。この人気を受けて、日本でも2005年と2007年にリメイク版が制作され、最終的に2008年には「花より男子ファイナル」として映画化された。2009年には、韓流ブームにより、同シリーズが韓国でもリメイクされ、同様に日本にも輸入された。しかしながら、この漫画の文化的な輸入および輸出の動きを開始させ、その後アジアで複数のリメイク版が制作されるようなきっかけを作ったのは、台湾の「オリジナル」のテレビドラマである。

B. 台湾におけるボーイズ・ラブ（BL、少年愛）漫画と同人誌

男性同士の同性愛を扱ったBL漫画は、一般的に、少女ロマンス漫画の「純愛」の特徴を踏襲しているが、時に、皮肉的もしくは滑稽な「ジェンダーの歪み」が見受けられる。この5年にわたり、台湾の日本のBL（および同人誌）漫画ファンは、脆弱な地元のポスト・ダウンロードの漫画マーケットを支えている。ほとんどのBL読者は、実際は、異性を愛する女性である。

世間で抱かれる一般的なイメージとは異なり、BLの女性読者やコスプレイヤーは、共にクリエイティブな人々である。BLのファンは単なる受動的な女性消費者ではない。それどころか、「退屈」で（社会のメインストリームの支持を

得た) 標準的な異性の恋愛関係にフラストレーションを感じており、愛、関係性、恋愛の異なる形を構築する手段として漫画を使おうとしているのである。また、コスプレイヤーも、自らが定義する基準の美、ファッション、自己表現を積極的に追求しているのである。

ある社会学の研究によると、台湾のBLファンには、「外面」的には5つの過度な振る舞いが見られる:(1) BL 漫画を大量に読み、消費し、収集する。(2) BL 漫画の同人誌を制作する。(3) BL 漫画のファンクラブやコミュニティを結成する。(4) 日本の「乙女ロード」に「巡礼」する。(5) 日常生活において男性同士の曖昧な関係について夢想する。「内面」的な特徴としては、(1) 仲間内でBL漫画ファンであることや、自らが構築したアイデンティティを強調する。(2) 仲間以外から誤解され、自制する。(3) BL漫画とその他を区別する。(4) 理想の愛に負けず復活を図る。

少女漫画と同様に、BL漫画も、ファンが実生活から受けるストレスを軽減し、社会規範の見直しを図り、夢想の世界を構築する上で役立ち、これにより、ファンは日々の生活に再び取り組むことができる。BLジャンルの理想の「純愛」は、BL漫画ファンのためのダイナミックで代替的な夢想の空間であり、実生活における「問題のある」もしくは「制限のある」恋愛関係の代替としての役割を果たしている。BL漫画のファンは「王子様」に自らを投影し、美男に囲まれた愛の生活を体験しているのかもしれない。進歩的な女性のBL漫画ファンの中には、BL漫画のバーチャルな世界から飛び出し、ゲイ・コミュニティに触れてゲイの権利運動を支援したり、ゲイのプライド・パレードに参加したりする者もいる。

同人誌とは、「プロもしくはアマチュアの漫画アーティストが個人的もしくは自費で漫画を出版および販売したもの」である。そうした芸術形態や表現方法では、個人による創作や個人によるプロモーションといったことが重視される。台湾では、日本を手本とした同人誌漫画やそうした漫画のマーケットは、大然ブックスより地元の漫画アーティスト達に合同出版の申し出があった1990年から1992年に誕生した。1997年、日本のSE株式会社と台湾の捷比漫画屋が共同スポンサーとなり、初の「コミック・ワールド」(CW、同人エキスポ)が台北で開催され、5,000名のファンが来場した。5年後、来場者数は5倍に増えた。これを機に、同人誌漫画は新たなステージに突入した。2002年、台湾同人誌科技会社がCW漫画ショーを引き継ぎ、コミック・ワールド・台湾(CWT)として再生させた。また、ファンシー・フロンティア(開拓動漫祭、FF)も、同人誌の活動やイベントに出資するスポンサー組織である。同組織では、2002年から、独自の同人エキスポを開催し、ほどなくして、台湾の第二の都市である高雄でFFエキスポを開催した。2012年の今年にはFFエキスポの10周年にあたる。

国際化および現地化のもう一つの興味深い事例として、台湾の指人形劇で

ある布袋戲とBLジャンルとの関連が挙げられる。日本のBLストーリーが、「形を変えて」、指人形劇のストーリーや台湾のコスプレ界に見受けられる。台湾において日本のBL文化が進化および現地化を遂げており、一方、最近では、台湾の指人形劇のファンが日本に増えるという、文化の逆流も見られる。2010年、NHKでは、台湾の指人形劇について、さらに、指人形劇が日本のコスプレ文化に与える影響の増大について、特別レポートを放送した。ある若いコスプレイヤーは、インタビューの中で、「台湾の人形劇の大ファンなんです。特に、衣装のデザインの繊細さや豪華さが好きです」と答えていた。

結論：女性、漫画、未来

この3年にわたり、刺激的で創作的な作品（特に、前述のAKRUやフランスを拠点とする林莉菁といった女性のアーティストによる作品）が、数多く誕生した。これにより、国際的なメディアの注目が台湾の漫画界や台湾の文化に向けられるようになった。AKRUの作品では、日本の大正時代のノスタルジーに、大都市の感受性やキュートなカフェのメイド・ファッションをからめ、日本の統治時代の10代のヒロインの内面の旅を辿る。林莉菁の作品である「福爾摩沙」は、ポルトガルのかつての統治者が台湾を間接的に表すのに使用した言葉、「フォルモサ」に由来する。この作品では、台湾の多言語および多民族社会の現実、さらには、大変な労力を要した民主主義の闘いを描いている。この作品は昨年フランスで出版され、スペインやイタリアでの出版に向けて、現在翻訳中である。林莉菁は、今週末（1月26日から29日まで）、フランスのアングレームで開催される国際漫画フェスティバルの「台湾コミックス」に参加する。アジア漫画セクションでは、台湾の漫画がメインとして取り上げられる。林莉菁の作品は、パリのジョルジュ・ポンピドゥ・センターで開催される、アジア漫画エキシビションでも取り上げられる予定である。1990年代に起きた台湾のニューシネマブームと同様に、今日の女性の漫画も、確かに、台湾の文化大使となっている。

最後に、プレゼンテーションの持ち時間に限りがあるものの、あるグループに是非注目して頂きたい。クリエイティブ・コミック・コレクション（CCC）というグループで、デジタルアーカイブを独自にネット上に持っている。このグループの全体的な作品や見解は台湾の漫画の未来を示している。目の肥えた世界中の漫画読者の間で、非常に高い人気を得ており、批評家からも高く評価されている。台湾政府下の中研院によって設立されたこのグループは、メンバーのほとんどが、AKRU、Yin Yin、古怪など、才能あふれるフレッシュな女性漫画アーティストである。これらのアーティストはジェンダー問題や台湾の歴史における女性の立場をテーマとして取り上げている。例えば、CCCの2011年の

夏の特別号である、「彼女の歴史：変容する台湾女性の顔、百年芳華」では、台湾の過去 100 年の歴史に見られる、女性の日常生活、結婚、社会的地位を取り上げた。

締めくくりとして、台湾の人々と日本の皆さまとの非常に特別な友好関係について触れたい。昨年 3 月 11 日の日本の震災の後、台湾ではすぐに救助支援の募金運動を開始した。こうした運動の中には、台湾の地元の漫画アーティストによる取り組みもあった。例えば、3 月の終わりから 4 月の終わりまで、台北漫画アーティスト協会では、「希望を信じて」というキャンペーンをインターネット上で実施し、「日本の被災者のために愛と希望を寄せて」という目標を掲げた。売り上げの全額は日本に寄付された。YouTube でこうしたキャンペーンの動画を是非みて頂きたい。これにより、漫画という側面にとどまらず、台湾がいかに日本を大切に思っているかが明らかになる。